
SAVIOUR ~ 虚無とゼロ ~

風羽 鷹音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SAVIOUR〜虚無とゼロ〜

【Nコード】

N3938X

【作者名】

風羽 鷹音

【あらすじ】

魔法使い<メイジ>である少女、ルイズが召喚したのは才人と名乗る少年。しかしその召喚に巻き込まれた一人の小さな少女がいた。少女は世界をわたる魔導師。ゼロの二つ名をもつルイズとゼロの姓を名乗る少女。少女の存在が物語を本来とは違う道へと導く。

オリ主である少女はめちゃくちゃ強いですが最強ではありません。上には上がいるものです。それに悲しいかな少女は所詮【イミテーション】なのです。

零一話 零との邂逅

運命という視点で見ればそれは「必然」なのかもしれないが、もっと小さな「今」や、少し前という視点で見れば「偶然」ともいえる。

まあ「必然」であれ「偶然」であれ本人にとっては過ぎたることで「今」起きてることに何ら変わりはない。

「必然」か「偶然」かを思案するのは悪くない。

ただ、タイミングを間違えれば「今」が疎かになるし、下手をすれば「先」がなくなりかねないことには注意したい。

もし自分たちの境遇が「誰か」による「必然」だったとしても「我々」が「我々」だからこそ、その「誰か」にとって「必然」だったのだろう。

要は相互作用だ。

ならばやはり「我々」の道は「我々」の選択によるものだ。

「あんた達、誰？」

とても、そう、とても気持ちのいい澄み渡った青空の下、少女は地面にへたり込む自分より小さな少女と、その後ろの少年にその声をかけた。
声をかけられた小さな少女は声をかけてきた少女をジッと見つめる。

白いブラウスの上に黒いマント、桃色がかったブロンドの長い髪に白い肌。
たぶん、かわいいとか美人とかそんな形容詞が似合う人だな。と小さな少女は思った。

声をかけられた私は周囲を見渡す。

さっきまでいた場所とは似ても似つかない。
やはり先程のゲートのような物が原因か？

「ちょっと！ 聞こえてるのっ？ あんた達は誰？」

こちらが黙ってるのに腹をたてたのか目の前の少女は語気をあらげる。

正直、こちらの方が聞きたいことがいくらかあるのだが・・・
少女は軽いため息をついて、

「ミルア・ゼロです。貴方は？」

ミルアが名乗ると少女は僅かに眉を寄せた。
周囲からも「ゼロだってよ」と明らかに嘲笑の意図が感じられる声がある。

そして目の前の少女はこめかみをピクピクさせながら軽く胸をそらして名乗る。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

長い。

無理だ。

聞き取りきれない。

そんな苦悩を他所にルイズと名乗った少女は、ミルアの後ろにいる、ミルアよりも年上であろう少年に視線を移して、

「で、あんたは誰？」

「え？ 俺？ 平賀才人」

少年は慌てて名乗った。

日本ではそれで正解だろうが、恐らくここでは違う。

家名が後のはずだ。

ミルアはそう思い、

「サイトです。サイト・ヒラガが正式です」

ミルアがそう言う时才人は困惑の表情を浮かべるが、そんな才人にミルアは首をふる。

今は黙っている。

そんなミルアの意図を理解したのか才人は軽く頷いた。

「どっちでもいいわ。で、あんた達、何処の平民よ？」

ルイズは苛立ちを隠そうとせずに問う。

平民？

階級社会だろうか？

さて、どう答えたものか。

ミルアは特に気にもしていなかったが、周囲には沢山の少年少女

達がいて、彼等もこちらを見て、平民だ、と口々に呟いていた。

しかも周囲にいるのは彼らだけではない、種族問わず大小様々な生物が彼らの周囲で大人しくしている。

全くもって状況がわからない。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を召喚してどうするの？ しかも二人も」

「召喚じゃなくてどっかから連れてきたんだろ？ 拉致だよ拉致」

召喚、なるほど魔法か。

自分と才人さんは、このルイズさんの魔法で召喚されたんだ。

だが召喚も拉致もミルアや才人としては然程違いはない。

状況を理解できつつあったミルアだが、才人は未だに全く理解できず地べたにへたりこんだまま、オロオロしている。

「違うわよっ！ 拉致なんてしないわよっ！ ちょっと間違えただけよっ！」

ルイズは声をあげ周囲の人間に抗議した。

しかしルイズの抗議に対して誰かが、

「ちよつと？ いつも失敗してるじゃないか？ そもそも成功したことあるのかよ？ 『ゼロのルイズ』」

『ゼロのルイズ』という言葉にルイズは眉をつり上げる。

周囲の人間やルイズが騒ぐ中、ミルアはさらに周囲を観察した。

広い広い草原の先、そこには石造りと見られる城が見える。

地球で言うところの中世ヨーロッパという具合か。

だがどうも何か違う。

先ほどまで私とサイトさんは大きなビルが立ち並ぶ、日本の東京にいたはずだ。

此処は空気が、肌触りが違いすぎる。

この感覚、違和感・・・異世界といったところか。

見るとルイズは未だ自分をからかってきた連中と揉めていた。

ミルアはそれをしり目に才人の方を向く。

すると才人は小声で、

「なあミルア、ここ何処なんだ？ もうワケわかんないんだけど」

「まあ、地球じゃ無いでしょうね。仮に地球だとしても先ほどまで私たちがいた地球じゃないでしょうね。まあ異世界じゃないでしょうか」

「い、異世界い？」

ミルアの突拍子もない言葉に驚愕する才人。

まあ、普通はその反応ですね。

私は異世界慣れしてるんでいつもの事といった具合ですけど。

内心、自嘲するミルア。

ミルアは不意に才人に顔を近づけ、

「才人さん、少しの間、私に任せてもらえませんか？ 異世界とかその手の事は比較的慣れてるので」

ミルアの言葉に才人はコクコクと頷く。

才人の了解を得たところでミルアは再び周囲を観察し始めた。

「ミスタ・コルベールっ！ お願いです！ もう一度召喚させてくださいっ！」

見るとルイズは中年の男性に詰め寄っていた。

黒いローブに大きな木の杖。いかにも魔法使いといった格好だ。髪が残念と言える状況だが、もしかしたらファッションかもしれない。

異世界の美意識なんてよくわからないので言及はできない。

その中年の男性はルイズに対して首を横にふり、

「ミス・ヴァリエール、それは許可できない。今行っている春の使魔召喚は神聖な儀式だ。それをやり直すということは、神聖な儀式を汚すということになってしまう。ミス・ヴァリエール、君は賢い生徒だ。理解できるね？」

ルイズは軽くたじろぐが、それでも諦めず、

「でもっ！ 平民を使い魔にするなんて聞いたことはありませんっ！」

ルイズがそう抗議すると周囲の少年少女達がどつと笑った。

そんな彼らをルイズは睨み付けるが、彼らは笑うことをやめない。ミルアがふと才人を見ると、その顔には不快感が出ていた。

事情はよくわからないが、大勢の人間が一人の少女を嘲笑っている光景は才人としては不快極まりなかった。

「ミス・ヴァリエール。彼らは平民かもしれない、人間を使い魔にしたという話も聞いたことはないが、彼らと契約しなければならぬ。何故かはわかるね？」

ミスタ・コルベールと呼ばれた男性がそう言うルイズは深いため息をついて肩を落とした。

そしてミルアや才人の方を見て再びため息。

ため息をつきたいのはこちらだ、という言葉を読み込みつつミルアは左手をすっ、と挙げ、

「あの、契約でしたら、こちらの才人さんとどうぞ」

ミルアの言葉に才人はぎょつとして、

「ちょ、ちょっと待てよっ！　なんでそうなるんだよっ！」

抗議する才人にミルアはぐつと顔を寄せ、

「あの状況下、召喚されたのはどう考えても才人さんでしょう？　私はあの鏡のようなものに吸い込まれる才人を助けようとして巻き込まれたんですよ？　それに私がどうして召喚に巻き込まれたのかわかりますか？」

自分の目をまっすぐ見て問うミルアに才人は顔を軽く背け、ばつが悪そうに頭をかいた。

ぽかぽかと気持ちよく晴れた空の下、才人は上機嫌で家路を急いでいた。

平賀才人。高校二年生の十七歳。

周囲の評価は『好奇心が強く負けず嫌い、けど何処かヌケている』まあおおむねそんなところだった。

そんな才人はまだこの時、日本の東京にいて、ノートパソコンの修理を終えたばかり。

やっとこれでインターネットができる。

ノートパソコンを修理に出す直前に、出会い系に登録していて今日までお預けをくらっていた。

これで彼女ができるかも、と期待に胸を膨らませていた。

そんな帰路の途中、ふと、才人の視界に影が差した。

何事？ と、才人は上を見上げる。

すると、一人の小さな少女が才人の目の前にふわりと降り立った。白い肌に真つ白な髪。白いブラウスに黒のプリーツスカート。

外人さんだろうか？

才人は目を丸くして少女をみていたが、少女はそんな才人をしり目に辺りをキョロキョロと見渡していた。

才人は意を決して、

「や、やあ今日はいい天気だね。ところで君は誰？」

と、ファーストコンタクトをはかる。

すると少女は才人の目をまっすぐ見て、

「ミルア・ゼロです。貴方は？」

「平賀才人」

才人はそう答えたが視線をミルアから外せずにいる。

深い深い、ミルアの瞳はそんな赤い色をしている。

物珍しいミルアの外見と現れかたが才人の人一倍強い好奇心を刺激した。

つい、とミルアは左手の人差し指を空に向ける。

上？ 空？ 何事？

サイトが訝しげに空を見上げると、

「見ました？」

ミルアがそう問う。

見た？ 何を？ 小さいのに黒いパンツとはやるな、この少女、とは思ったけど他は何にも見てないよ？

無論、才人は声に出してはいない。

とりあえず才人は何のことかわからないといった具合で首をかしげる。

ミルアも首をかしげながら「飛んできるとこ見られたと思ったんですが・・・」などつつばやいている。

飛んでは？ なんのこっちゃ？

「才人さん此処は何処ですか？」

「ここ？ 日本の東京」

才人がそう答えるとミルアは才人に背を向け「また？ また日本？」

と、つぶやいている。

なんなんだろうこの子は？

才人は腕を組み考え始めた。

才人が見た時、確かにミルアは空から降ってきたように感じる。

しかし才人が見上げてみても周囲に飛び降りれるような都合のいい高さの建物はない。

才人がいる場所は街中ではあるが、大通りから道を一本それた人通りが少ない場所。

高い建物などが無いわけではないが才人の目から見ても高すぎるのだ。

才人が見たように、ふわりと降りるのには無理がある。

あれ？ どうやったたらあんな風にふわりと降りれるんだ？

才人は疑問に思いつつふと後ろを振り返る。

「え？」

才人は思わず声を漏らした。

目の前にカマキリがいる。

いや、ただのカマキリではない。

その上半身だけで才人の身長はありそうな巨大なカマキリが『空中にぽっかりと空いた穴』から、その身を乗り出していた。

そしてその複眼は才人を捉えていた。少なくとも才人はそう感じた。

やばい。これはもしかしくなくても相当やばい。

才人が逃げ腰になった、その時、才人の頭上を飛び越えたミルアが巨大なカマキリの眉間に蹴りを見舞い、その巨体を『空中にぽっかりと空いた穴』に押し戻した。

そしてそのまま穴に向かって左手を突きだして、

「消し飛べっ！」

ミルアの叫びと同時にその左手から『空中にぽっかりと空いた穴』に向かって放たれた光の奔流が巨大なカマキリを飲み込んだ。

そしてまるで引き戸を閉めるように『空中にぽっかりと空いた穴』を勢いよく閉める

才人はただただその光景を啞然として見ていた。

何あれ？ ビーム？ この子、手からビームぶっ放したよ？ あれか、必殺技か？ すげえカッコイイっ！

才人が感動する中、ふう、と一息吐いたミルアが才人の方を振りかえる。

何を感じてるのだろうかこの人は・・・

ミルアはそう思い首をかしげた。

「魔導師？ 魔法使いなもの？」

「まあそんなものと捉えてもらっていいです」

才人は頭を抱えた。

自分の日常にファンタジーが飛び込んできたのだから無理はない。ドッキリを疑ってもみたが、それはすぐに消えた。

あの巨大なカマキリと目が合った時、あの時感じた恐怖は本物だった。

憎悪も何もない、ただ目があっただけの自分を殺す。あの巨大なカマキリからはそんな意思を感じ取れた。その感覚を思い出し才人は思わず身震いする。

そんな才人を見てミルアは、

「まあ野良イヌに噛まれたと思って・・・」

「死ぬからね？ あれに噛まれたら俺、絶対死ぬからねっ？」

「でしょうね・・・」

ミルアはそう言って肩をすくめた。

「しかしよく魔導師とか信じますね才人さん」

そんなミルアの問いに才人は冷や汗を流しながら、

「いや、目の前で起こったことを考えれば素直に信じたほうが楽かなあ、と」

才人の答えにミルアはふむふむと頷く。
そして才人は続けて、

「で、あのでかいカマキリはなんだったの？」

「ああ、それは知らなくていいですよ。たぶんもう大丈夫でしょうし。ほら世の中には知らないほうがいい事って多いですから」

ミルアはそう言って両掌をひろげ胸の前でぱたと振った。

それは才人の問いに対する拒否の意味だったが、才人は、何この小動物かわいい、なんて思っていた。

才人の心の声など露知らず、ミルアは人差し指で才人のほうを指し、

「ところで才人さん」

「ん？ なんだいミルア」

「私と才人さんの間に浮かんでいる鏡のようなコレはなんでしょうね？」

「あははー、魔法使いのミルアにわからないものが俺にわかるはずないじゃん」

正直無視したかった。

さっきの事だけに非常に無視したかった。

才人とミルアの前には高さは二メートルほどにして幅は一メートルほどの鏡のような物が浮かんでいた。

何これ？ さっきの続きですかチクシヨー。

才人が誰に向けたらいいかわからない怒りを胸の内でもんもんとさせている中、ミルアは何処から拾ってきたのか木の枝を鏡のような物の中に突っ込んで、引き抜いていた。

「なんともないですね・・・」

ミルアは木の枝をまじまじと見てそうつぶやいた。

それを聞いた才人は、

へえ、なんともないんだ、などと思いながら、あるうことが自分の頭を鏡のような物の中へ突っ込んだ。

『好奇心が強くて負けず嫌い、けど何処か又けている』

好奇心が強くて又けている。

いらぬところで自分の特性を発揮した才人は頭を突っ込んだ瞬間気を失い、そのままズルズルと鏡のような物の中へと引き摺り込まれてゆく。

無論あわてたのは、それを目の前で目撃したミルアだ。

あほですかこの人はっ！

などと思いつつ、すでに胸のあたりまで引き摺り込まれている才人の腰にしがみつき、なんとか引き抜こうとする。

引き抜いたら胸から上がなかったとか、そんな光景は勘弁してほしいな、などと考えながら才人の腰を引く。

しかし引き摺り込まれる力とそれに対抗するミルアの力は完全に拮抗していた。

いや僅かではあるがミルアのほうが力負けしている。

私が力負けしている？

ミルアの中の焦りが徐々に大きくなっていた。

その時、ぐつと才人の腰が浮いた。もちろん腰にしがみついたミルアごと。

それが何を意味するか。

ミルアは才人を引き抜こうと両足を地面につけ踏ん張っていたのだが、才人の腰がミルアごと浮き、ミルアの両足も地面から浮きあがってしまったのだ。

空を飛ぶことができるミルアでも地面と空中では踏ん張れる具合が違う。

空中ではかなり心もとないのだ。

結果として、ミルアがヤバイと思った瞬間にはミルアは才人ともども鏡のような物の中へと引き摺り込まれていったのだった。

零一話 零との邂逅（後書き）

はじめましてこんにちは。

作者の風羽鷹音です。

ゼロの使い魔の二次小説書きたい欲求が限界に達して書きました。
自分の他作品のように後書きでミニコーナーやるかはまだ未定です。
しかも更新は・・・不定期・・・です。

この零一話は5000字ほどですが、

零二話以降は2500字〜3000字前後になる予定です。

携帯などでサクッと読むには無理のない量かな、と。

そんなこんなですが、この先も読んでいただけたなら幸いです。
ではー

零二話 刻まれる伝説（前編）

旅に出た娘を強く思う親は多いだろう。

その多くは『心配』や『不安』といったもので構成されているだろう。

だが『愉快』や『期待』を持った者も中にはいる。

『渴望』のもと生まれ『愉快』や『期待』を知らず知らずのうちに背負わされる。

なんとも迷惑な話である。

「誠に申し訳ありませんでした」

そう言つて才人は床に両手をつけミルアに土下座していた。

明らかに自分より年下の相手に土下座。

それを傍目で見っていたルイズは、うわぁ、といった具合の表情をしていた。

謝罪の理由はもちろんミルアを巻き込んで召喚されてしまったこと。

召喚のゲートに、何を思ったのか頭から突っ込んでこの有様。才人、ミルアともども踏んだり蹴ったりであった。

ちなみに今、彼らがいるのは召喚した本人、ルイズの部屋だった。調度品はルイズの私物なのかどれもこれも高価なアンティークに見える。

そして、ここはトリステイン魔法学院の女子寮の一室らしい。

先ほどの召喚の儀が行われた広場にて、ミルアの問いで才人が自分のしでかしたことを思い出し目を泳がせている中、ミルアはルイズとコルベールに自分が召喚に巻き込まれただけで召喚に応じたわけでないことを説明し、どうぞ好きにしてくださいと言わんばかりに才人を差し出した。

そして才人に対しての使い魔の契約がなされた。

この契約『コントラクト・サーヴァント』の方法というのがキスである。

ほっぺにとか、おでこにとかではなく唇に。

ファーストキスだったのに、と才人とルイズの両名はばやいていたが、すぐさま才人が「熱いつ！」といいながら地面を転げ出した。何事っ？ とミルアが才人に駆け寄るとルイズが使い魔のルーンが刻まれてるだけですぐに収まると教えた。

そしてルイズの言うとおりすぐに収まったのか才人が何かわめきながら立ち上がりルイズに駆け寄ろうとした。

ルイズが僅かに後ずさりする中、その場の監督の任があるのであるうコルベールがすぐさま才人に何かしようとしたが、それよりも早くミルアが動いた。

ミルアは才人の足に自分の足を引っ掛けたのだ。

結果、前方に対して勢いのあった才人は突然、足をとられそのまま前のめりに地面に突っ込んだ。

「ルイズさんとファーストキスの次は大地とセカンドキスですか？

どんな味がします？」

表情を変えず淡々とそう言うミルアに対してルイズは内心「土の味でしょ。たぶん」と突っ込んでいた。

場所はふたたびトリステイン魔法学院女子寮のルイズの部屋。

「で、私はこの使い魔のついでにあんたの面倒も見ればいいわけ？」

「面倒といっても雨露をしのぐため部屋の隅っこで寝かせてもらえればかまいませんし、食事については学院に口添えしていただければ」

「面倒くさいけど、まあ、いいわ。この馬鹿なつつ使い魔のせいとはいえ、こいつの、ごごごご主人様である以上？ 私にも責任の一端はあるわけだし？」

使い魔の主として余裕ある態度として笑みを浮かべてるつもりなのだろうけど、ミルアの目には、その笑顔がかなりひきつっているのがよく見えた。

表情もそうだが、台詞を囁んでる時点でアウトな気はするが。

「私の事は才人さんのおまけという事でかまいませんよ？ 使い魔としてのお仕事のお手伝いもさせていただきます」

「使い魔の仕事ってなにすればいいんだよ？」

仕事と聞いて自分の話題だと気がついた才人が会話に入ってきた。

「使い魔の仕事ってのはね、主人の目や耳となること、まあ要するに視覚や聴覚の共有ね。それや秘薬なんかを見つけること。あと重要なのは主人の身を守ること」

ルイズはそこまで言っただけで自分の使い魔である才人をじっとみて、

「まああんたじゃ全部無理よね。どう見てもただの人間だし。しかも平民」

「ただの人間でわるかったなチクショーっ！」

うがーと吠える才人であったがルイズはそれを鼻で笑う。
それをミルアは首をわずかにかしげて見ていた。

「ただの人間？」

ミルアがそうつぶやくと才人が何か思い出したかのような顔になり、ミルアの方を向いて、

「護衛的なことならミルアの方が適任だぜ。なんたってミルアはま——」

魔法使い、と言おうとして才人はその場に突っ伏した。

ミルアのごぶしが才人の鳩尾に命中したのだ。

才人に当たる瞬間ブレーキはかけたが、その動きはルイズの目ではまともに捉える事ができなかった。

「あんた何者？」

そう問うルイズにミルアは、

「一言で言うくと戦士ですかね。まあこんな見た目なので威厳も迫力もないですけど」

「なんか、あんたの方が使い魔として使える気がしてきた」

「才人さんの今後の伸びに期待してみては？」

ミルアがそう言うのとルイズは、えー、と明らかに嫌そうな顔をして未だ突っ伏している才人を見た。

才人は未だピクピクとしながら、

「くそ、平民平民で馬鹿にしゃがって」

「だって平民は平民じゃない」

「あきらめましょう才人さん。文化の違いです。私たちは平民です」

ルイズにはつさりと切り捨てられる才人にミルアが終了宣言。

そう文化の違い。

極端に言えば魔法が使え名があるものが貴族。

魔法が使えない名もないただの人間が平民。

例外も多少はあるらしいが大雑把にこんな感じらしい。

実にシンプルだが、力の差は大きく、基本、貴族の平民に対する扱いはルイズと同様かそれ以上。

ルイズよりましなのは少数派といえるかもしれない。

「家に帰りたい」

才人は地面に突っ伏したまま言うが、ルイズとミルアが、

「だからさっき散々説明したでしょ。召喚した使い魔を送り返す魔法なんかないって。よって無理」

「ちなみに使い魔の契約を切るためには死ぬしかないようです。死んでみます?」

「ごめんなさい」

とりあえず謝っておく才人だった。

時刻はすでに夜、ルイズが完全に寝入った判断した才人がもそもそと自らの寝床の上で動き出した。

ちなみにこの寝床藁束である。そして毛布一枚。

もともとルイズは人間を召喚するつもりなど微塵もなかったのだから人間の寝床など用意されているはずもなく。

「なあミルア起きてるか?」

地球とは違いこの世界ハルケギニアには月が二つあり、その明りが窓から部屋を照らしていた。

才人はその月明かりを頼りに部屋の隅で眠っているはずのミルアに近づいていく。

「起きてますよ」

と壁に寄り添って状態で毛布ごと丸くなっていたミルアが目をあ

ける。

才人は思わずのけぞった。

ミルアの赤い瞳が月明かりに反射してなんとも怪しい光を放っていたのだ。

それに気がついたのかミルアは手をかざして月明かりを遮り、

「ああ、すみません。猫なんかと同じで夜目が利くのですが、やはりどうしても光を反射してしまうようで」

「いや、ちょっと驚いただけだし」

「で？ 私に何か聞きたいことでも？」

「あのさ？ ミルアの魔法で元の世界に帰れないのか？」

才人の問いにミルアは少し考えるようなそぶりを見せて、

「難しいですね。すごく」

「なんで？」

「ここの正確な座標が全く分からないんですよ。ここと元の世界の位置関係がわからないとどうしようもないんです」

「なんのこっちゃ？」

「例えば何処かの砂漠にポンと放り出されて、日本という目的地に帰りたくても方角がわからない。現状はそんな感じです」

「意味はわかったけど、とりあえずその場から動いてみるってのは

？」

「動いた先に流砂があっても知りませんよ。この場合は適当な座標に飛んだらそこは宇宙空間でした、とか」

「たびたび申し訳ありませんでした」

謝ってばかりの才人である。

ミルアは軽く欠伸をすると、

「もう寝ましょう。明日からは使い魔としての仕事があるでしょうから」

「そうだよなあ。俺、使い魔になっちゃったんだよなあ」

そういつて才人は自分の左手を見つめる。

そこには何と書かれているのかわからないが、使い魔の証であるルーンが刻まれていた。

そして自分の藁束まで戻ると横になり、毛布にくるまって目を閉じた。

ミルアはその月明かりに反射して光る瞳で眠りにつく才人を見ながら、誰にも聞こえないような小さな声で、

「ただの人間、ね」

と呟いて自らも眠りについた。

零二話 刻まれる伝説（前編）（後書き）

後書きでは本編には特に意味のないプチ解説をしたいと思います。
おもに主人公であるミルアをメインに。

此処に何か重要な情報が隠されている——
なんてことはないのです。

必要な解説は全部本編中に書くようにします。
なすけて……

『SAVIOUR〜ミニ裏話〜』

【食事については学院に口添えしていただければ】

腹が減っては戦はできませんよね？

しかしまあどこかの騎士王のごとく腹ペコというわけではありませんが。

【あきらめましょう才人さん。文化の違いです。私たちは平民です】

他所の文化に口出すつもりはない。

という考えをミルアが持っているわけではありません。

ミルア自身あまりひどい差別意識がある階級社会は好きではありませんが、

一個人が文化に対してとやかくいっても仕方ないし面倒くさい、
というのが本音です。

降りかかる火の粉は自分で振り払える、という自信のもと余裕かま

してるわけです。

【ちなみに使い魔の契約を切るためには死ぬしかないようです。死んでみます？】

表情に一切の変化を見せず淡々と才人に選択を迫る・・・
それがミルアクオリティ

【藁束】

藁束なめんな

【難しいですね。すごく】

すごく難しいだけで絶対無理ではない。
ただ才人を連れてとなればリスクが高すぎる。
才人はそこに気がつかず無理と判断する。
もう、せっかちなんだから。

【動いた先に流砂があっても知りませんよ。この場合は適当な座標に飛んだらそこは宇宙空間でした、とか】

ミルアもあほではないので転移前に転移先を観測することぐらいはします。

でも右も左もわからない中、目的先の座標を割り出すのは砂漠の中から一粒の砂金を見つけるようなもの。

魔力と時間がいくらあっても足りないから面倒くさい。
才人君には悪いのですが面倒くさいんです。

様々な世界で出会いと別れを繰り返してきたミルアですが、
毎回毎回新しい出会いを大切にします。

ミルアはそんな子です。

幸いなことにその辺ひねくれてません。

刻まれた伝説（後編）

ミスタ・コルベールはトリステイン魔法学院の教師である。奉職してもう二十年。立派な中堅である。

『火』系統の魔法を得意とするメイジで、二つ名は『炎蛇のコルベール』

彼は今、トリステイン魔法学院の図書館にいる。

三十メートルほどの本棚がならぶその光景は壮観である。

その中にある教師のみが閲覧を許される『フェニアのライブラリー』に彼はいた。

彼は先日ルイズが召喚した少年の左手のルーンについて調べていた。

見たことのないルーンは研究者としての側面を持つ彼にとっては実に興味深いものだった。

そして彼は同時に焦っていた。

原因はルイズの召喚に巻き込まれて此处に来たという少女に関してであった。

少年少女ともに杖もなくマントをはおっているわけでもなかった。一見すると平民に見えた。

しかし教師として。生徒を守る身として万が一があつてはいけない。

故に彼は最初に少年の方、才人に魔力の有無や魔法の効果などを調べる『ディテクト・マジック』をかけた。

結果、やはりただの平民だった。

一安心して少女、ミルアの方にも『ディテクト・マジック』をかけた。

弾かれた。

そう弾かれたのだ。

そしてミルアは、ずっと彼と視線を交えた。

敵意は感じられなかったが明らかにこちらを訝しげに見ている。

魔法をかける仕草は見られていない。

ミルアの視覚外からかけたのだからそれは間違いないはずだった。

平民ではない。

おそらくメイジ。

没落した貴族の息女か、その血を継ぐもの。

そして魔法の知識と実力がある。

いや、最悪、お忍びで平民の振りして街に出て召喚に巻き込まれた現役貴族とかありえる。

こちらから下手なことはできないが敵意を感じられない分そっとしておけば今ところ害はないかもしれない、それでも詳細のわからないメイジと思われる少女の存在に彼は焦っていた。

浮遊魔法『レビテーション』を要いて巨大な本棚の間を行ったり来たりしてどれほどの時間がたったであろうか、彼はついに見つけた。

才人の左手に刻まれたルーンと同じものを。

彼はその本に記載されていることに驚いて目を見開く。

そして慌てて床に降りると学院長室に向かって走り出した。

才人が目を覚ますと外は既に明るい。

朝か。

才人はそう思い立ち上がり体を伸ばす。

藁束の上で一晩過ごすなんて初めての体験だった。

「体の調子はどうですか？」

先に目が覚めていたのか毛布をはおった状態のミルアが声をかけ
てきた。

「大丈夫、問題ないぜ」

才人がそう答えるとミルアは、そうですか、とだけ言いルイズの
ベットに近づいて行った。

「ルイズさん、朝ですよ」

ミルアがルイズにそう声をかけるが眠り姫は軽くもぞりと動くだ
けで起きる気配はない。

二度三度と声をかけるが起きる気配はまったくない。
それを見ていた才人がしびれをきらして図太い眠り姫の毛布を引
っぺがす。

そもそも使い魔は彼なのだから最初から彼が起こせばいいのだが。
何にせよ毛布を引っぺがされた眠り姫ことルイズは覚醒し上体を
起こしてきよろきよろと周囲を見る。

「な、何事っ？」

「朝だよ。お嬢様」

才人がそう答えると、ルイズはきょとんとして、

「え？ 誰？」

「才人だ」

「ミルアです」

何故か二度目の自己紹介。

それでルイズも完全に覚醒したのか、

「あ、ああ使い魔ね。昨日私が召喚したんだった」

そういつてルイズは頭を抱えて、

「夢ならよかった」

才人たちにとっては失礼なことをぶっこいた。

それはこっちの台詞だ、と才人が内心つつこむ。

気を取り直したのかルイズは、

「服」

と呟いた。

才人はなんの事かと首をかしげたがミルアが、

「どれですか？」

「椅子に制服かかってるでしょ。あと下着」

「下着は何処に？」

「クローゼットの一番下」

ルイズの指示にできばきと動くミルア。

才人がポカンとその光景を眺めていると、

「着せて」

思春期真っ盛りの才人にとって、とんでもないことを言い出した。というか、既にルイズは下着一枚になっている。

才人が慌てて後ろを振り向くと後ろから、

「ルイズさん手を挙げてください、袖が通せません。あ、二度寝は駄目ですよ。授業はどうするつもりですか」

才人は冷静に、どっちが年下だよ、と思っていた。

着替えを終えたルイズが才人たちを連れて部屋の外に出た。

そこにはルイズの部屋と同じような木のドアが並んでいて、そのドアの一つが開いて、炎のような赤い髪をした女の子が出てきた。健康そうな褐色の肌にルイズよりも高い身長、そして断崖絶壁のようなルイズとは対照的なそびえる二つの山。

おまけにブラウスのボタンを上から二つはずしている。

その、そびえる二つの山、つまりはおっぱいに才人の目が釘付けになる。

ミルアも一言、

「おおきいですね」

と、ぶちまけた。

そんなミルアに対して、その大きなおっぱいの持ち主はにっこりとほほ笑んで「ありがとう」と言った。

そして、その視線をルイズに向け、

「おはようルイズ」

「・・・おはようキュルケ」

「あなたの使い魔ってこの子たち？」

キュルケの問いにルイズは不機嫌そうにしてミルアの頭に自分の手のひらを置き、

「こっちはおまけ。使い魔はこれよ」

そう言っただけで才人を指差した。

「あははっ！ 凄くないっ！ 本当に人間を召喚したのねっ！」

キュルケはひとしきり笑った後、ニヤリとして、

「しかし『サモン・サーヴァント』で平民を召喚するなんてさすが『ゼロのルイズ』ね」

「るっさい」

相当ルイズが怒っているのがわかる。

「うるさい」が勢いがついて「るっさい」になっている。

キュルケはそんなルイズを意に介さず、

「当然あたしも昨日召喚したわ。無論一発で成功よ。フレーム」

そう言つてキュルケが自室に声をかけると彼女の部屋から、トラ程の大きさはある巨大な赤いトカゲが現れた。

赤い体に燃え盛る炎でできた尻尾、口からはチロチロと炎が出ている。

才人はその姿に驚き「あぶねえ」と声をあげるが、ミルアは興味津津という具合に近づき、その巨大なトカゲ、フレイムの前にしゃがんだ。

「これ、もしかしてサラマンダーとかですか？」

ミルアの時にキュルケは、

「よく知つてるわね。ええそうよ。燃え盛る鮮やかな炎の尻尾は間違ひなく火竜山脈のサラマンダー。『火』属性の私にはぴったりの使い魔よ。賢くて私の言うこともちゃんど聞くし。命令しない限り人は襲わないし」

「サラマンダーの質まではよくわかりませんが、凄いですね、キュル——」

キュルケさん、と言おうとしたミルアだったが最後まで言う事が出来なかった。

ミルアの上半身は既にフレイムの口の中にあつた。

フレイムが噛みついたのだ。

いや、ミルアが両手で踏ん張っているため完全には噛まれていないが、それでも口の中にすっぽりと入りこんでいる状況には変わらない。

あげく、フレイムはそのまま、ぶんぶんと首を上下左右に振り始めた。

夜行性なのか縦長の瞳孔、その瞳にはミルアに対する明らかな敵

意がある。

突然の事に一瞬わけがわからなかった残された三人だったが、才人、ルイズ、キュルケの順に我に返り、

「おおおいいいっ！ ミルアっ！」

「ええっええっ！ ちょっとっ！ キュルケっ！」

「や、やめなさいっ フレイムっ！ ペっ、ぺっしなさいっ！」

三者三様に真っ青な顔をしている。

キュルケの命令に従ってフレイムはミルアをぺっと吐き出した。ただし振りまわしていた勢いのまま。

ミルアはその勢いで背中から壁に叩きつけられる、ずるずる崩れ落ちるが、すぐさま、むくりと立ち上がった。

体にかみ傷はなく血も出ていない。

が、それ以上に酷いことになっていた。

上半身がよだれまみれになっていた。

そんな悲惨な姿を見て才人たちの顔に血の気が戻る。

怪我がないからこそ、そのよだれまみれの姿は場を僅かに和ませた。

一歩間違えばとんでもないことになってたのは間違いない。

フレイムが、ではあるが。

刻まれた伝説（後編）（後書き）

『SAVIOUR〜ミミ裏話〜』 その二

【弾かれた】

無意識に弾くのがミルアクオリティ
無論そのあと気が付いているわけですが。

【眠り姫】

キスで起こされるとか夢見るだけ無駄。
世の中そんなに甘くないんです。
毛布をひっぺがすのは基本。

【てきぱきと動くミルア】

このくらい余裕余裕。
相手がむきむきの、まっばのおっさんでも問題ない。

【ルイズさん手を挙げてください、袖が通せません。あ、二度寝は

駄目ですよ。授業はどうするつもりですか】

才人の感想はごもつとも。

【おおきいですね】

当然ミルアも断崖絶壁。

まあ世の中には『ロリ巨乳』とかいますけど、ミルアは断崖絶壁。

【サラマンダーとかですか？】

疑問形なのはミルアの記憶の中ではサラマンダーが空飛んでた。

【ぺっ、ぺっしなさいっ！】

お母さんとかペットの飼い主とかのお決まりの台詞。

【上半身がよだれまみれになっていた】

実に気持ちが悪い。

べったべた。

いやー

え？　なんでミルアが襲われたか？
こんなところで言うわけにはいかないのです。
言おうものなら私がフレイムの餌食に――

――通信途絶――

零三話 垣間見るゼロ（前編）

できそこないの長姉。

失敗作の長姉。

不良品・・・ああ、どれだけアレを侮辱したところで気が晴れない。

アレは今も何処かで生きている。

そう思うと腹立たしくてたまらない。

理屈でない感情とは実に厄介なものだ。

人とはいつもこんな厄介なものと付き合っているのか・・・

朝っぱらから悲惨な目にあつた。

それがミルアの正直な感想だった。

とりあえずキュルケに渡された手拭いでフレイムのよだれをふき取る。

が若干臭う。

表情こそ変わらないが明らかにげんなりしているのが身にまとう空気で分かった。

命令しない限り人は襲わない、と言った手前、なによりフレイムの主として責任がある。

少なくとも使い魔のおまけとして此処にいる以上、ただの平民よりかほんの僅か印象はましなのだろう、キュルケは自分の部屋から香水を持ちだすと軽くミルアにふきかけた。

ミルアは「ありがとうございます」と礼を言いうと、フレイムに視線を移す。

その瞳にはもう敵意はなく、ミルアはフレイムの頭をなでた。フレイムもおとなしくなでられていて、キュルケはそれを仲直りしたのだろうと判断して、改めて才人も含め自己紹介した後、フレイムともども、その場を後にした。

トリスティン魔法学院の食堂にはやたらと長い三つのテーブルが並んでおり、それぞれ学年別なのか色の違うマントをはおった生徒たちが座っていた。

一階の上にはロフトがあり、そこには教師陣が座っている。

豪華な飾りつけに雰囲気のあるローソク、山盛りに盛られたフルーツに綺麗な花々。

才人はその豪華さにポカンとしているがミルアにいたっては無表情。

関心ない、と言った具合である。

この豪華さ、ルイズが貴族にふさわしい食堂でなければならいから、と説明してくれた。

「あんたたちみたいな平民は普通、一生この『アルヴィーズの食堂』には入れないんだからね」

ルイズがそう言うとミルアは首をかしげ、

「アルヴィーズ？」

「小人って意味よ」

そう言ってルイズが壁際の精巧な小人の彫像を指す。
才人はそれを見て、

「なんか夜中に動きそうだな」

「よく知ってるわね？ 夜中に踊ってるわ」

ルイズの言葉に再びポカンとする才人。
ファンタジーあなどりがたし。

「いいから早く椅子をひいてちょうだい。座れないじゃない」

ルイズの言葉に才人が、え？ という感じの顔をしていると、ミルアがさつと椅子をひき、ルイズが礼も言わずにそこに座る。

才人もその隣に自分で椅子をひいて座った。

テーブルの上にはすさまじく豪華な食事が並んでいる。

こんな豪華な料理、日本にいた時にも食べたことがない。

わくわくと心驚かせていた才人だったが、ふとルイズの隣を見るとミルアは立ったままだ。

「あれ？ ミルア、すわらねえの？」

才人がそう疑問を呈すると、ミルアは無言であちらこちらを指差す。

その指差す方向を一つ一つ確かめる才人。

食堂の外に使い魔たちがちらほら見える。

何を言いたいのか、よくわからん。

再び首をかしげる才人。

するとルイズがミルアを見て、

「あんたはよくわかつてるみたいね。普通はね、使い魔は外。あんなたちは私の特別な計らいで此処にいるのよ」

そしてルイズは床を指さす。

そこには二枚の皿。

皿の中身が同じことを考えると、二人分ということがわかった。

「俺たちの？」

才人が自分とミルアを指差してルイズに問うと、ルイズは無情にも「そうよ」と返した。

それを聞きがつくりと肩を落とす才人。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもったことを感謝いたします」

祈りの声が唱和され、ルイズも目を閉じそれに加わる。

ささやか？ これささやかとかの限度を超えてるんですけど？

なに？ 使い魔ってこんな虐待を甘んじないやらないのかよっ！

才人の心の声を知る由もなく、皆の食事が始まると、ミルアはちょこんと床に正座して皿の上の、小さな肉のかけらが浮いたスープと皿の端に乗った小さな硬いパン二切れをさつさと平らげた。そしてそのままルイズの横の床で正座のまま微動だにしなかった。才人はいとうと床の上にすわりつつ、こっそりとルイズの食事に

手を伸ばすが、ぴしゃりと、その手を弾かれお情けで鶏肉の皮を恵んでもらっていた。

肉は癖になるから駄目とのことらしい。

完全にペットじゃねえかよチクシヨっ！

才人の心の叫びは誰にも届くことはなかった。

魔法学院の教室は大学の講義室に似ていた。

床や壁は石造りで、教卓を起点に扇状に並べられた机、そしてこれらの机は教卓から階段状に上へ上へと並べられていた。

ちゃんと後ろの生徒にも教師が見えるようになっている。

ルイズたちが教室に入ると先に教室に来ていた生徒たちが一斉にこちらを振りかえった。

何これ怖い。

才人がたじろいでいると、くすくすと笑い声が聞こえてくる。

俺笑われてる？ と才人が自分を指差しながらミルアの方を見るがミルアは首を横に振ってそれを否定する。

じゃあなんだろう、と才人が疑問に思いつつ目を泳がせていると今朝会ったキュルケがいた。

その周囲には男子生徒が群がっており逆ハーレム状態。

こいつら、おっぱい目当てか？ むむむ、けしからん。

などと自分を棚に上げて憤る才人。

周囲を見てみればさまざまな使い魔がいる。

どれもこれもファンタジーの世界から飛び出してきたような者たち。

才人は軽い興奮状態だった。

ミルアと言えば針のむしろ状態だった。

針というのはこの場合、視線だ。
だが生徒たちではない。

その視線の主は周囲にいる使い魔たち。
かなり居心地が悪かった。

若干、帰りたい。

とミルアが誰にも聞こえない声でばやいた。

ミルアが椅子をひきルイズがそこに座る。

才人は食堂と同様、床に座ってみたが目の前に机があつてかなり窮屈だった。

しかたなくルイズの横の椅子に座る。

ルイズが軽く才人を睨むが今回は何も言わなかった。

ミルアはというと、先ほど同様、床に座っている。

たださすがにミルアも窮屈だったのか膝で立ち、ちょうど机から頭が飛び出すような感じになっていた。

ルイズの右に才人。左にミルア。

右にいる才人に関してはルイズは黙認することにしたが、ミルアがそうはいかなかった。

机から頭が飛び出すような感じ、ちょうどルイズの肘の位置なのだ。

さすがに顔面にひじ打ちはまずい。事故でもだ。

そう感じたルイズは、ミルアの前、自分の左横の椅子をこんこんと軽く叩いた。

ミルアがルイズを見て、

「いいのですか？」

「いいから座りなさい」

ルイズにそう言われミルアはしぶしぶ椅子に座った。

零三話 垣間見るゼロ（前編）（後書き）

『SAVIOUR〜ミニ裏話〜』その三

【若干臭う】

一応女の子ですから。
や、そもそも男でも嫌だ。

【ミルアがさつと椅子をひき、ルイズが礼も言わずにそこに座る】

完全に才人の仕事ぶんどってます。
しかも本人にその自覚なし。
ああ、たちが悪い。

【ちよこんと床に正座】

小動物最強

【生徒たちが一斉にこちらを振りかえった】

何これマジ怖い

【ミルアは首を横に振ってそれを否定する】

こちらの文化を多少理解しつつあるミルアは、ルイズと才人を含めた三人、特にルイズが笑われていると判断。
才人のみではないので首を振って否定しました。

【ミルアが椅子をひきルイズがそこに座る】

ミルアはロリメイドの素質があります。

【顔面にひじ打ちはまずい】

や、まあ普通にまずいわな。
しかも顔面じゃあ鼻血出るわ。

生徒たちが一斉にこちらを振りかえった

これと同様の記述が原作にもあるのですが、マジで怖いです。
どこのホラーだよって話です。

垣間見るゼロ（後編）

教室の扉が開き教師と思われる中年の女性が現れた。
紫のローブを身にまとい帽子をかぶっている。

「あの人も魔法使い、メイジだっけ？」

「ええ、そうよ」

才人の問いにルイズが答える。

女性は教室を一通り見渡すと、にっこりとほほ笑んで、

「春の使い魔召喚はみごと大成功のようですね。このシュヴルーズ、春の新学期の度に新たな使い魔たちを見るのがとても楽しみなんですよ」

彼女はそう言うと、ふと才人やミルアに目をとめ、

「ミス・ヴァリエール、とても変わった使い魔を召喚したのですね」

その表情はおだやかで、周囲の生徒と違って侮蔑の意はこめられていない。

だが彼女の台詞を皮切りに周囲の生徒が、どっと笑いだした。

それは今の今まで我慢してたという具合だ。

そこから先はルイズと周囲の生徒たちとの口論だった。

笑いの種にされている才人は不機嫌極まりないものだったがミルアは我関せずを地でいていた。

いや本心では、早く授業始まらないかな、と思っていた。

シュヴルーズも再三注意したが、生徒たちの笑いは収まることは

ない。

しびれを切らした彼女は自らの魔法、錬金で生み出した赤土をいつまでも笑い続ける生徒たちの口に張り付けた。

そして教室が静かになると彼女は満足したようにほほ笑んで、

「それでは授業を始めます」

彼女が杖を振ると机の上に拳より少し小さい程度の石ころがいくつか現れた。

「私は『赤土のシュヴルーズ』これから一年間『土』系統の魔法を皆さんに抗議していきます」

そして彼女は四大系統『火』『水』『土』『風』の中で『土』の系統の重要性を説く。

それは生活に密接したもので金属の精製や、建物の建造、農作物の収穫など、それはとても納得のいく内容だった。

魔法が扱えない才人でも彼女の言うことはよく理解できた。そして自分たちの世界での『科学』がここでは『魔法』なのだと理解した。

たしかに魔法が使える貴族がいばるわけだよな。

才人が一人うんうんと納得していると、シュヴルーズが、

「では、これから『土』系統魔法の基本である錬金を皆さんに覚えてもらいます」

彼女はそう言うと、石ころに向かって杖をふると短くルーンを唱えた。

すると石ころが光り出し、その光が収まると石ころはピカピカと光る金属になっていた。

それを見たキュルケは身を乗り出して、

「そそそ、それは、ごご、ゴールドですか？ ミス・シュヴルーズ
っ！」

「いいえ、これは真鍮ですよ、ミス・ツエルプストー。ゴールドを
錬金できるのは『スクウェア』クラスのメイジだけです」

そしてシュヴルーズはこほんと咳払いすると、

「私は『トライアングル』クラスのメイジですから」

それを聞いていた才人が隣のルイズをつついた。
ルイズは不機嫌そうな顔をして、

「なによ、授業中よ」

「あのさ、トライアングルとかスクウェアとか、何？」

「系統を足せる数の事よ」

ルイズの説明いわく系統を足せる数が増えればその分、強力な、
あるいは幅広く魔法が使えるらしい。

「一から順に『ドット』『ライン』『トライアングル』『スクウェア』
となるらしい。」

ルイズがわざわざ丁寧に才人に説明していると（ミルアも聞き耳
を立てていたが）それにシュヴルーズが気がついて、

「ミス・ヴァリエールっ！」

「は、はいっ！」

「授業中の私語はいただけませんね」

「は、はい・・・」

「鍊金の実演はあなたにやってもらいましょう」

シュヴルーズのその言葉に教室がざわめいた。
キュルケがおずおずと声をあげる。

「ミス・シュヴルーズ、やめたほうがいいと思います?」

「何故ですか?」

「危険だからです」

キュルケがきっぱりとそう言う。とルイズは、

「やりますっ！」

ルイズがそう言った時、キュルケは失敗したと思った。

いつもルイズをからかっているキュルケとしてはルイズの負けず嫌いは理解している。

にも関わらず自分が「危険だから」などと言えばルイズの負けず嫌いに火がつくのは想像できたはずだ。

もつとうまくやればよかった。

キュルケの後悔はもはやあとの祭りだ。

「ルイズ、やめて」

悲しい事にキュルケの声はルイズには届かない。

ルイズの表情は真剣そのものだ。

もともとルイズは美少女といえるレベルの容姿だ。

胸元こそ断崖絶壁状態だが、そんなもの個人の好みによるところだし。

つまりはどういう事かという杖を手に真剣な表情のルイズがとても美しかった。

酷い待遇の才人でさえその美しさに見惚れてしまっていた。

こんな美少女がなんで周囲から馬鹿にされているんだろうかと疑問に思うほど。

そして見惚れていたからこそ、周囲の人間がおびえたような表情になって各々机の下に潜り込むという異様な光景に気がつかなかった。

教師であるシュヴルーズも教師として真剣な生徒であるルイズが嬉しいらしく、にこにこ彼女を見ていた。

ミルアもルイズは見ていたが周囲の異様な光景にも気が付いており首を軽くかしげていた。

「さあミス・ヴァリエール、鍊金したい金属を心に強く思い浮かべるのです。大丈夫ですよ貴方ならできます」

シュヴルーズの言葉に、机の下に潜り込んだ生徒たちは「無責任なっ！」と心の中で悲鳴をあげた。

ルイズはそのかわいらしい口で短くルーンを紡ぎ軽く手にした杖を振りおろした。

次の瞬間まきおこる爆音、爆風。

要するに爆発。

ルイズが杖を振りおろした瞬間、鍊金される筈である石ころが、それに乗せた机ごと爆発した。

驚く暇なんてあっただろうか。

爆風が教室にあった様々な物を吹き飛ばした。

机の下に隠れていた生徒たちはなんとか難を逃れたものの机の上の教材は物の見事にふつとんでそこらじゅうに散乱している。

次いで、爆音も周囲に被害をもたらした教室中にいた使い魔たちが、その大きな音に驚いて混乱して暴れ出したのだ。

そんな中、爆発を引き起こしたであろうルイズは服はいたるところが破けパンツまで見えている状況、顔もすすで汚れていたが澄まし顔。

ところがその顔が驚愕で歪んだ。

混乱した使い魔の中に厄介なのがいた。

その大きな蛇である使い魔は自らを、そして自らの主人を脅かした爆発を引き起こしたのがルイズだと気がつき、その小さな体を飲み込みまんと大きく口をあけルイズに飛びかかった。

「ひいつ・・・」

ルイズが思わず声をあげたが、大きな蛇の口はルイズの目前で動きを止め、そのまま地面にビタンつと落ちた。

見ればミルアが蛇のしっぽを掴んで蛇の動きを止めている。

動きを止められた蛇は標的をミルアへと変更して跳びかかるが、ミルアは机の上をぴょんぴょんと跳びまわり逃げ回った。

その逃亡劇は蛇の主人である生徒の制止の声があがるまで続けた。

垣間見るゼロ（後編）（後書き）

『SAVIOUR』ミニ裏話』 その三

【ミス・ヴァリエール、とても変わった使い魔を召喚したのですね】

お話を考えていた当初、ミルアをルイズの使い魔に、というパターンがなかったわけではない。

ただ、あくまでミルアという存在の設定上、使い魔という縛りは面倒だったのと、才人との関係で一つ思いついたものがあつたので、あくまで「おまけ」として召喚させました。

【ミルアも聞き耳を立てていたが】

私語は駄目だよね私語は。

結果として元から口数が多いわけではないミルアがこの話、全くしゃべらない。

てか三話では二言三言しかしゃべってない。
なんてこった。ばんなこった。

【ミルアは机の上をぴよんぴよんと跳びまわり逃げ回った。】

書いてて牛若丸思い出しました。

まあ当初のイメージは白い髪に赤い目なので跳ねまわる雪つなぎ、といった具合だったんですが。

ルイズ「そう言えば、あの馬鹿は何処？」

ミルア「才人さんならそこでのびてます」

くみみ終く

零四話 使い魔とおまけ (前編)

血のつながりは時として不思議な事をまきおこすという。

生まれてから一度も出会ったことがないのに奇跡的な出会いをはたしたり。

ならば私もそれに期待しよう。

その時には私の手でアレを・・・

学院本塔の最上階に学院長室はある。

白い口髭に長い髪をした、学院長室の主、オスマンはそこにいた。百歳とも三百歳とも言われる彼だが、確かに学院長としての威厳が感じられた。

黙っていればの話だが。

いや、黙っていても鼻毛を抜いてる様に威厳は感じられない。

鼻毛を抜くのをやめたかと思えば机のひきだしから水ギセルと取り出した。

しかし部屋の隅の机で雑務をこなしていた秘書のロングビルが、さっと羽ペンを振ると水ギセルは彼女の手元へとんでいく。

「ミス・ロングビル。年寄りのささやかな楽しみを奪って楽しいか

ね？ 心は痛まないのかな？」

「オールド・オスマン。貴方の体調を管理するのも秘書である私の務めなのです。そんなに早く死にたいのですか？ でしたらさっさと死んでください」

「あれ？ 前半立派な事言ってるのに後半酷くない？」

いかにも仕事ができる女といったキリリとした顔立ちに眼鏡をかけたロングビルの容赦のない言葉にオスマンはがっくりと肩を落とす。

しかし、さすがに歳の功というべきか、彼はすぐさま立ち直るとロングビルの後ろに立ち、

「平和な時だからこそ、その時間を有意義に、楽しく活用する。大切なことだと思わないかね？ ミス——」

「おしりを撫でられている私は微塵も楽しくありません」

ロングビルがキツパリというオスマンは口を半開きにしてよちよちと歩き始めた。

今にも何処かを徘徊しそうな。

都合が悪くなるとボケたフリをするのが彼の常套手段である。

もともと、いつもそれを見ているロングビルには意味はなく、ただただ腹立たしいだけで、彼女は自らの足元からスカートの中を覗き込む一匹のハツカネズミを睨みつけた。

このハツカネズミはオスマンの使い魔で、覗き行為は無論、主であるオスマンの差し金である。

ハツカネズミは、ちゅうと一鳴きすると、すぐさまオスマンの足を駆け上り彼の肩へと避難した。

オスマンは肩に乗ったハツカネズミにナッツを与えながら、

「おお、モートソグニルよ、そうかそうか怖かったか。で？ どうじゃった？ ふむふむ、白、純白か・・・なるほどのう。しかしミス・ロングビルには黒や紫といった大人な下着を身に着けてほしいのう。白が似合うのはうら若き乙女まで——」

そこまで言ってオスマンの視界は天地が逆転した。

ロングビルがオスマンの足を払ったのだ。

そして床に倒れたところを、

「あだっ、こらっ、やめんかつ！ 無言で年寄りを蹴るなど」

オスマンは頭を抱え丸くなるが、ロングビルは無言でさらに蹴り続ける。

「ごめん、やめて、もうしない、ほんともうしない」

この、恐らく平和であろう時間はドアが勢いよく開けられ、一人の人物が転がり込んできたことによって破られる。部屋に転がり込んできたのはコルベールだった。

「なんじゃね、いきなり騒々しいのお」

オスマンは腕を後ろに組み堂々とした態度でコルベールを向かいれた。

みればロングビルは既に机に向かい仕事を再開している。

驚くべき早業。

コルベールは先ほどのバイオレンスな光景など知るよしもなく、

「オールド・オスマン大変ですっ！　大変なんですっ！」

オスマンは全身の痛みをこらえつつ、

「大変なことなどあるものか、すべては小事。なんとも平和じゃ」

「これですっ！　これを見てくださいつ！」

「何じゃ？　『始祖ブリミルの使い魔たち』？　おぬしまたこんな古臭いものを引っ張り出しおって。そんな暇があるなら生徒達の親が我先に学費を投げてよこすようなすばらしい授業でも考えてくれんかのう・・・」

オスマンがやれやれといった表情で言うと、コルベールは、

「これもみてくださいつ！」

そういつてオスマンに見せたのは一冊のスケッチブックだった。そこには才人の左手に刻まれたルーン文字がスケッチしてある。しっかりとミス・ヴァリエールの使い魔という注釈つきでだ。

それを見たオスマンは目の色を変え雰囲気が一変した。

先程までばけたふりをしていたとは思えないほどに。

オスマンはロングビルにすぐさま退席させると、

「さて詳しい話を聞こうかの？　ミスタ・コルベール」

そう言って部屋の外に音が漏れないよう、サイレントの魔法をかけた。

ルイズの引き起こした爆発によってめちゃくちゃになった教室は一応その姿を取り戻していた。

吹き飛んだ窓ガラスも散乱した机も元どおりである。

ルイズ、才人、ミルアの三人は教室をめちゃくちゃにした責任をとって、もうすぐ昼食という時間まで後始末をしていたのだ。

爆発を引き起こした張本人であるルイズはもちろん、使い魔である才人、そして、そのおまけとしてミルアも参加していた。

机や窓ガラスなどの重い物はルイズの細腕では無理なので才人がしぶしぶ運んでいたが、ふとミルアを見ると机などを軽々と運んでいる。

負けるかと変な意地をはった才人は三人の中で一番へとへとになっていた。

ちなみにルイズは机や窓を拭いただけなのでさほど疲れているようには見えない。

ミルアも涼しい顔をしていた。

後片付けを終えた三人は昼食を取るため食堂に向かっていた。

その途中、ルイズは才人が必死に笑いをこらえている事に気が付いた。

「何よ？ 言いたいことがあるならいいなさい。聞いてあげるわ」

ルイズがそう言うと才人はもう我慢の限界といわんばかりに笑い出して、

「さつき教室で他の奴が言ってたの聞いたけど、お前、魔法の成功の確率がゼロなんだって？　なるほどなあ、だから『ゼロのルイズ』なわけだ」

ルイズからの待遇が酷いだけに、才人はここぞとばかりに笑った。才人としてはささやかな仕返しのもりだったのだ。しかし現実是非常である。

ルイズは先程から拳を強く握り、ぷるぷると震えていた。

それに気が付いたミルアは横からルイズの顔を覗き込む。

これはやばいな・・・うん、ほっておこう。

ミルアは見なかったことにした。

もしミルアが見た表情が泣き顔だったりしたら恐らく才人を蹴り飛ばしていただろう。

しかし、そこにあつた表情は今にも爆発寸前の相当やばいものだった。

で、才人はというとこれでもかと笑い別の意味でぷるぷると震えている。

ルイズに気が付いていない。

何とも哀れである。

食堂に着くとルイズは席に着くことなく床に置かれた二組の、パンとスープが入った皿を手に取り、それを一組にまとめた。

パンはともかくスープがあふれそうになっている。

そしてルイズはそれを、ずいとミルアに突き出して、

「あんたが全部食べていいわ」

ミルアはきょんととして軽く首をかしげ自分を指差した。
しかし才人はルイズの言葉に驚き、

「お、おれの分は？」

その言葉にルイズはひきつった笑みを浮かべ、そして爆発した。

「ご、ご、ご主人様の事を笑い飛ばした使い魔には罰が必要よね。
そ、そうよ、しつけよ、しつけっ！ ご飯抜きよっ！ あんたはっ
っ！」

ルイズはそう言って才人をびしっと指差した。
すると才人は慌てて、

「ごめん、許して。もう笑わない。だから俺の食事——いや、こ
の哀れな使い魔にエサをお返しください、ご主人様っ！」

「ダメ、絶対ダメっ！ いったでしょ？ しつけよ、し・つ・け。
甘やかしたらつけあがるに決まってるんだから」

ルイズの言葉に才人はがっくりと膝を折ると、やがて、ふらふら
と立ち上がり、そのまま食堂を後にした。

零四話 使い魔とおまけ (前編) (後書き)

『SAVIOUR』ミニ裏話』 その五

【白が似合うのはうら若き乙女まで】

純白、縞パン。私はどれも好きです（誰も聞いてない）

ああ、でもスケスケとかはそれ程好きじゃないなあ（だから聞いてない）

現状、ミルアのパンツは黒です。

【ふとミルアを見ると机などを軽々と運んでいる】

見た目こそルイズと同じ細腕。

でも質が違うということ。

どう違うかはよくわからない。

【これはやばいな・・・うん、ほっておこう】

触らぬ神に祟り無し。

世の中にはわざわざ地雷を踏みに行く人もいますが・・・

才人「俺のエサ・・・ぐすん」

ミルア「・・・」(エサって言うちやってるよ、この人は)

使い魔とおまけ（後編）

「よかったのですか？」

食事が始まると、ふとミルアはそう口にした。

ルイズが「何がよ？」と不機嫌そうに答えると、

「才人さんですよ。ただでさえ朝はそれほど食べていないのに昼食を抜いてしまつて」

そのうえ教室の片付けをこなした後だ。
相当の空腹のはずだった。

「さつきも言つたでしょ？ しつけよ、しつけ。それにあれば甘やかすと付け上がる気がするのよ」

ルイズがそういうとミルアは甘やかされた才人が付け上がる様を想像してみた。

——容易に想像ができますよ才人さん。

ミルアは軽くため息をつくと話を変え、

「ところでルイズさんは本当に魔法が成功しないのですか？」

するとルイズは苦々しい顔をして、

「あんたも見たでしょ？」

「爆発しましたね」

「そうよ」

「あれって失敗なんですか？ 見ようによつては爆発の魔法にも見えるのですが」

「私は錬金がしたかったのよ。なのに・・・しかも何を唱えても爆発、爆発——」

ルイズはそう言いながら料理を次々とハイペースで口に運ぶ。
そんな食べ方は太るんじゃないかな？
ミルアはそんな事を思いつつ、

「何を唱えても爆発って変な話ですね。相性の問題では？」

「相性？ 属性のこと？ だったら全部試したわよ。それでも駄目だったの」

「でしたら現状はお手上げですね。まあ爆発自体魔法としては十分通用するとは思うのですが」

「どつという意味よ」

「日常生活では、それほど使い道があるとは思えないのですが、こ
と戦闘になれば、あの爆発は脅威ですよ。いきなりドカンですから」

それを聞いたルイズは嫌そうな顔をして、

「私は普通に魔法が使いたいのよ」

「そうですか、すみません。お役に立てなくて」

そう言うミルアに対してルイズは片手をふって、

「別に期待してるわけじゃないからいいわ」

そう言う料理をさらに口の中へかつこんでいった。

だからその食べ方はまずいんじゃないかな？

と、ミルアは声に出さずに突っ込んでいた。

やはり悔しいのか目に涙をためているルイズを横目に見つつ――

しかし、どうにも気になる。

と、さっさと食事を終えたミルアは腕を組んで考え込んでいた。

ここハルケギニアに来てそれほど多くの魔法を見てきたわけではないけどルイズさんの魔法を、失敗と切って捨てるには少し違和感を感じている。

爆発の直前、ルイズさんの魔力、こちらで言う精神力が一瞬で圧縮されるのを感じた。

次の瞬間にドカンである。

まったくもってコントロールできていない気がする。

コントロールできずにドカンなどと、まるで私のように。

魔法がまともに成功しないためにコントロールの感覚がまったく掴めていないのかもしれない。

本人が自覚する形で魔法が成功すれば、それを切欠に道は開けるかも知れないが・・・

しかし、変な話だ。

周囲の誰も、コントロールできずに失敗、という可能性を指摘し

ないのだろうか。

かつて彼女のように失敗を繰り返していた者がいなかったか、あるいは彼女を無能と決め込んでまともに問題を解決しようとしてこなかったか。

もし後者であるなら魔法学院などと名乗るのはおこがましい話だな。

異世界から才人を召喚した事といいミルアはルイズが無能とはとても思えなかった。

「あんだ、何やってんのよ」

「何って手伝い」

ルイズがデザートのカークをトレイに乗せて運んできた才人に声をかけると才人はしれっと答えた。

あんたは誰の使い魔か言ってみなさい。

とルイズの目が言っているが才人はまったく気がついていない。

そんな中、ミルアは才人の隣でカークを配膳しているメイドの少女に目をやる。

そして周囲を見渡した。

珍しいかな？

それがミルアがメイドに抱いた感想だった。

シヨートの黒髪に黒い瞳。

日本人の才人と同じだ。

才さんが彼女を手伝っているのは親近感を覚えたからでもあるのかな？

ミルアがそう思っていると、その少女と目が合った。

少女が、あれ？ と、いった感じの表情をしていると、それに気がついた才人が、ミルアと少女、互いのことを紹介し始める。

「こいつはミルア。ミルア・ゼロって名前。で、この子はシエスタ。ミルアは俺が召喚されるときに巻き込まれて此処に来たんだ。だから俺のおまけってことになってる」

シエスタと紹介された少女は軽く頭をさげて、

「はじめまして、シエスタです」

ミルアも立ち上がるとぺこりと頭を下げて、

「はじめまして、ミルア・ゼロです」

ミルアが挨拶をする横で、ふん、といった感じでルイズがケーキをパクついていた。

結構な勢いで――

いいかげん、その食べ方はよくないと言ったほうがいいのだろうか。

とミルアは真剣に悩みはじめていた。

才人とシエスタがケーキの配膳に戻ると、ミルアは再び床に座りルイズの食事が終わるのを待っていた。

周囲を観察しながら待っていると、ふいに目の前に皿が突き出された。

何かと試ってみてみれば、そこには一口、いや、かろうじて二口

はあろうかと思われるケーキが残されていた。

ミルアはそれを突き出した本人、ルイズを見上げて軽く首をかしげる。

ルイズはあさつての方向を見ながら、

「ご、ご、ご主人様が恵んであげるわっ！」

あれ？　いつからルイズさんは私のご主人様になったんだろうか。そんな事を思いつつ、ミルアは「ありがとうございます」といつてケーキが残された皿を受け取る。

ミルアのルイズに対する個人評価には今まで『プライドが高くて負けず嫌い』しかなかったが『やさしいところもある』と追加しておいた。

ちなみに、たった二口分とはいえ恵んでもらったケーキはとてもおいしかった。

使い魔とおまけ (後編) (後書き)

『SAVIOUR』ミニ裏話』

【ただでさえ朝はそれほど食べていないのに】

パン一つに一皿分のスープ。

育ち盛りの才人にはつらかるうに・・・

そして、この現状はミルアにとってもつらかったりする。

【コントロールできずにドカンなどと、まるで私のように】

魔法の話ではないがミルア自身の話であることは間違いなく。
それはおいおい出てくる話ではある。

【あの爆発は脅威ですよ。いきなりドカンですから】

ハルケギニアに来てまともに魔法を使用していないミルアですが、
平和な日常においてミルアの魔法は何の意味もありません。

ですから戦闘における使い道が真っ先に思いついたりする。

この娘、物騒極まりないです。

ミルア「悪かったですね。物騒極まりなくて」

ルイズ「あんた誰と話してるの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3938x/>

SAVIOUR ~ 虚無とゼロ ~

2011年11月1日09時27分発行